



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3184 号 2016.8.13 発行

### 授産製品 おしゃれに一新

河北新報 2016年8月12日

#### 試作品を手に笑顔を見せる利用者ら



秋田市の特定障害福祉サービス事業所「ドリームカンパニーあゆみ」が手工芸「さをり織り」の布を使った商品を開発した。施設利用者が織り、専修学校の秋田公立美術大付属高等学院（秋田市）の生徒有志がデザインやロゴマークの作成で協力。今月下旬に発売する予定で、関係者は「魅力が増した商品を使ってほしい」と願う。

さをり織りは色彩や素材、織り方に制約がないため障害者が作業しやすいという。商品はポーチやTシャツ、トートバッグなど計5種類。

施設利用者が編んだ布をドット柄や魚などに切り取り、バッグの生地やシャツなどに縫い付けた。

靴が描かれたロゴマークは「take take（てくてく）」と名付け、商品に付く。「一歩ずつ、一つずつ」との意味で、生徒らが施設利用者らと共に歩むという思いを込めた。

同事業所は就労支援の一環で、さをり織りの布を使ってポーチやバッグなどを製作、販売していた。だがデザインの問題などから売り上げは伸びず、施設利用者の賃金も増えなかった。

事業所を運営する社会福祉法人の職員、佐藤美智子さん（59）が今年4月、知人の公立美大付属高等学院教諭の岸上恭史さん（41）に相談。岸上さんはデザイン分野を志望する高草木美歩さん（18）ら3年生の女子3人に話をもち掛けた。

3人は授業や放課後の時間を使って取り組み、6月にロゴマークを作成。商品の企画案をまとめた。

「若い感性を生かした授産製品になった」と佐藤さん。試作品を手にした施設利用者の菅原舞さん（22）は「おしゃれでかわいい」と笑顔で話した。

商品は施設利用者と職員が制作中。27日の付属高等学院の学園祭を皮切りに、秋田市役所内のコンビニエンスストアなどで販売する。価格はポーチ500円（税込み）など。

連絡先はドリームカンパニーあゆみ018（829）2994。

### 高齢者の転居お助け 天理の社会福祉法人

読売新聞 2016年08月12日

新たな住まいを見つけたいと願う高齢者の転居を支援する活動に、天理市福住町の社会福祉法人「やすらぎ会」が取り組んでいる。年を取るにつれて住む場所へのニーズが変化する一方、賃貸住宅では家主側に、高齢者の入居を敬遠する傾向があるためだ。同会は「高齢者への『貸し渋り』をなくしたい」として、契約や引っ越しなどの相談・支援を無料で

行っている。(岡田英也)



◇家主・業者と無料で交渉  
転居希望の女性から相談を受ける同会の吉田さん(右)＝同会提供

年を取ると、住んでいた家の老朽化や、周囲との人間関係の変化、足腰が弱って駅や病院の近くに住む必要性に迫られるなど、様々な理由で転居を希望するケースが出てくる。

ところが、日本賃貸住宅管理協会のアンケート調査によると、高齢者世帯と賃貸契約を結ぶことに「拒否感がある」と回答した家主は7割を超える。生活困窮による家賃の不払いや、近隣住民とのトラブルなどを懸念するためという。

こうした問題の解消を目的に、厚生労働省は2014年度から、全国12自治体で転居支援のモデル事業を実施。やすらぎ会の取り組みもその一環で、天理市が同会に事業委託し、国の補助金を受けて昨年8月から、同市在住か転入を希望する人を対象に、相談の受け付けを開始した。これまでに約30件の相談が寄せられている。

同会では、まず担当者が転居希望者から、引っ越したいと思う理由や条件などを聞き取り、支援プランを作る。その後、不動産仲介店に同行して契約手続きを進めたり、家賃交渉をしたりして、借り手と貸し手が安心して契約できるようにする。契約後のフォローも行う。

課題は、多様なニーズに対応できる賃貸物件の発掘だ。ある80歳代女性は、障害を持つ息子と知人宅に間借りしていたが、退去するよう求められ、同市中心部で一軒家を探した。条件に合う物件が少なく難航したが、近くマンションに入居する見通しが立ったという。

同会の担当者、吉田真哉さんは「家主や不動産業者が高齢者に対して抱く不安は漠然としたもの。間に入ることによって安心感が生まれる」と意義を強調し、「活動をもっと知ってもらい、潜在的なニーズを掘り起こしたい」と話す。問い合わせは同会(0743・69・2216)へ。

## 発達障害の子供らの居場所作りを考えるシンポ 20日に天王寺区で

産経新聞 2016年8月12日

発達障害の子供らの地域での“居場所”作りについて考えるシンポジウム「生きるための居場所作り～根拠のない自信とあきらめない支援」が、20日、大阪市天王寺区のクレオ大阪中央で開かれる。鹿児島県・奄美大島で活動し、発達障害の子供やその母親らが集まる「おばあの会」のメンバーが参加し、孤立した状況から笑顔を取り戻していった自らの体験を報告する。

発達障害の子供とその親らを支援する淀川キリスト教病院の医師、谷均史さんを中心とした市民グループ「いつも青空舎」の主催。

「おばあの会」は、不登校になるなど孤独を感じている子供たちをなんとかしたいと、奄美市教育委員会のスクールソーシャルワーカーの福山八代美さんが自宅を開放して平成23年から開いている会で、谷さんも発足に関わった。

基本的な活動は、集まって食事をしておしゃべりするだけ。学校では団体行動ができず叱られて暗い気持ちを抱え、時には「死にたい」と言っていた子供たちも、おばあの会で自由に過ごすことで笑顔を取り戻していったという。

午後1時から参加費500円。定員120人で申し込みが必要。申し込みは事務局の奥村さん((電)090・3713・3519)。

イグ・ノーベル・ドクター新見正則の日常

相模原殺傷事件に思う…自分が知的障害になっても、精いっぱい生きたい

読売新聞 2016年8月12日

この毎週連載のエッセーも早いもので3年目に突入しています。ヨミドクターの担当の方に「好きなことを、好きなだけ、いつまでも書いて下さい」と言われて始まった連載です。しかし、先日初めてヨミドクターの編集長が会いに来て下さり、「そろそろ終了をお願い出来ませんか」と言われました。当方が期限を決めていいということでしたので、年内で終了としました。つまり終了に向けてのカウントダウンの始まりです。今までは、その週に起こったことをヒントに医療に繋がる記事をいろいろと書き下ろしてきましたが、これからは終了を見据えて書いていきたいと思っています。12月23日掲載予定の原稿が最後になると思います。

**判断能力の有無が焦点だが…**

また、今までは編集部の意向は一切なく自分が書きたい内容を書いてきましたが、今回初めて編集長よりお題を頂きました。先日相模原で起きた19人の殺人事件です。

まず僕は、この事件が、「判断能力のない青年が19人の無垢な人間を殺した」というストーリーであったことを願っています。そうであれば、措置入院とされた青年が何故退院になったのかという疑問や、今後の措置入院の在り方が焦点になります。

困ることは、この青年に実は正常な判断能力があった場合です。そうであれば、「なぜこの青年が19人を犠牲にした戦後最悪の殺人事件を引き起こしたか」という経過を解明することが、今後の再発防止のために必要になります。裁判の経過から次第に判明するのでしょうか。19人の方に知的障害があったことがひとつの動機とも伝えられています。詳細はわかりません。メディアの表面的な報道だけから推測で判断することは危険だと思っています。

**「奪われる命」と「全うする命」**

今日は我が家の会話をご紹介します。娘は12歳です。

娘「パパ、何故人を殺してはいけないの？」

僕「それは絶対的なルールだからだよ」

娘「人の命は地球よりも重いか、人権があるからじゃないの？」

僕「そんなことを言うと例外が生まれるよね。人を殺してはいけないというのは現代社会での理屈抜きのルールなんだよ」

娘「シリアで拘束された日本人に日本政府は身代金を払わなかったよね。地球より命が重いなら払って当然でしょ。また、人権があるからと言うと、人権がないような存在になった瞬間に殺してよくなるよね」

僕「人権は生きている以上、誰にでもあるんでしょ」

娘「憲法上は、法律上は、建前上はそうだよ」

僕「でも2年前に死んだ僕たちのおばあちゃん、選挙に行っても、選挙の仕組みさえわからなかったよね。何も書けなかったね。認知症が進んで。そして、パパのこともわからなくなって、そして歩けなくなって、食べられなくなって、そして亡くなったでしょ。そんなおばあちゃんでも、死ぬまで人権はあるんだよ。でもそんな人には人権がないという人が出てきたら、おばあちゃんは殺されてもよくなっちゃうでしょ。理屈で防衛すれば、理屈で突破されかねないでしょ。人を殺してはいけないというのは理屈抜きのルールなんだよ」

娘「おばあちゃんは、最後はなにも食べられなかったね。飲むこともできなかったね。どんどんと軽くなって、最後は私より軽くなって、そして女神のようになって亡くなったよね。わたし、死んだおばあちゃんのそばで一晩一緒に寝たんだよ」

僕「そうだね。おばあちゃんに点滴すれば、胃にチューブを入れて栄養を与えれば、まだまだ生きていたよ。点滴もチューブも入れないと決めたのは、おばあちゃんとの生前の約束

だけど、でもそれを無視して点滴すれば長生きした訳だから、パパは殺人者かな？」  
娘「まったくわからないおばあちゃんに 丁度 お迎えが来たんだよ」  
僕「パパが同じように、自分が自分とわからなくなって、そして食べられなくなったら、  
ばあちゃんと同じように天国に送ってね。約束だよ」

### 認知症で知的障害者になる可能性も

僕は想像力が大切だと思っています。今健康であっても、いつ自分に、身体的または知的障害が訪れるかもしれません。人はだれでも、いつでも、事故や病気で障害を持つ身になります。だからこそ、助け合って生きていくのだと思っています。パラリンピックで頑張っている障害者も格好いいし、自分の障害を背負って精一杯生きている障害者も格好いいと思います。

もっとも頻度が高い障害は、知的障害だと思っています。それは、認知症で知的障害になるからです。だれもが僕たちの母のようになる可能性があります。特に僕は直接の血縁関係だから、なおさらです。

「自分が知的障害になっても、僕は精一杯に生きたい。そして世の中に助けてもらいたい。でも、自分が自分とわからなくなったら、僕は母のところに送ってもらいたい。潔くお迎えを受け入れたい」

僕は、そう願っています。

急な事故や病気で、自分が自分だとわからない時は少なからずあります。そんな時には家族は 奇蹟 を祈ります。当然です。在宅の往診に行くと、そんな家庭にも遭遇します。家族が奇蹟を祈っている間は、精一杯社会が助け続けるべきだと思います。でも、家族もあきらめて、そして医療もあきらめたら、その時がお迎えの時かも知れません。

メディアの表面的な報道を信じるのではなく、ぜひ障害者施設でボランティアを行ってもらいたいのです。精一杯に生きている人と一緒にいると、こちらももっと真剣に生きなければと思知らされます。そして重度の知的障害施設のボランティアにも、ぜひ赴いてもらいたいし、メディアにもそんな施設のドキュメンタリーなども逃げずに制作してもらいたいのです。いろいろな現実を知らなければ物事を正しく判断できないと思っています。

人それぞれが、少しでも幸せになれるように。

### 職員連れ回し、障害の程度聞き凶行...相模原殺傷 読売新聞 2016年08月12日

神奈川県相模原市緑区の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で起きた殺傷事件で、植松聖容疑者（26）が職員1人を各居室へ同行させて障害の軽重を聞き出し、重度障害者から襲っていたことが捜査関係者への取材でわかった。

目前の惨状に職員がショックで動けなくなった後は、一人で移動し殺傷を続けたとみられる。

植松容疑者は7月26日午前2時頃、東棟1階の居室窓を割って侵入した。捜査関係者によると、同室の女性（19）を刺殺後、駆け付けた職員を殴って施設内の区画（ホーム）を仕切る扉の鍵を強奪。職員の両手を結束バンドで縛り居室に連れ回し、入所者の障害の程度を確認して殺傷したという。

職員が動けなくなると、結束バンドで手すりに拘束。一人で東棟1階の別ホーム、西棟1階の2ホーム、同2階の2ホームの順に回り、次々と入所者を襲ったとみられる。

### カード破産が多い？ ADHD アピタル・中島美鈴 朝日新聞 2016年8月12日

ADHD が疑われる主婦・サチコさん（40代女性）には、こんなことがしょっちゅうあります。

サチコ 「あの子、そういえば、新しい靴が欲しいって言ってたっけ」

さらに買い物が続けようと、靴屋のレジでクレジットカードを出したところ「お客様、

このカードは使えなくなっています」と言われてしまいました。今月の限度額を超えているようなのです。サチコさんの財布は、クレジットカードの利用明細やレシートなどでパンパンに膨らんでいます。サチコさんは、靴を買うのをあきらめました。

サチコさんはいつだって、自分に必要なものだけを買っているつもりですが、気づくといつも生活費が足りなくなっています。昔から貯金は苦手なタイプでした。特にクレジットカードを持ってからは、いつもお金のことが心配でなりません。残高が足りるのか心もとないまま、生活しています。いつカード会社から連絡が来るかと、どぎまぎしているのです。かといって、家計簿をつけても3日と続きません。

実は、サチコさんに限らず、ADHDをもつ人は、お金の管理が苦手です。

理由はさまざまですが、現実的・直接的な理由はいくつか指摘されています。①衝動買いが多い、②ギャンブルに夢中になって借金する、③クレジットカードの限度額を把握できない。こんなことが直接の引き金となっているようです。

それでは、どうして大人のADHDの方は、衝動買いをしてしまったり、ギャンブルに依存してしまったり、クレジットカードを使いこなせなかったりするのでしょうか。

実は、これらも脳の特性と大きく関係しているのです。

#### ①衝動買い：

前回お伝えしたとおり、研究によるとADHDの方の脳は、「今買ったら、お金が足りなくなる。だから我慢！」とブレーキをかけても、そのブレーキが他の人よりききにくいことがわかっています。さらには、買い物ほどすぐに結果が手に入るものではありません。報酬遅延勾配が急な、つまり、待つのが苦手ですぐに手に入るものを好むADHDの方には、買い物は大きな楽しみです。

買い物の基準を「欲しいかどうか」ではなく、「これがないと生きていけないかどうか」に変えてみましょう。もっと衝動買い名人の方は、「バーゲンの季節は財布には限られた現金しか入れない」といった物理的な防御策にでましょう。

#### ②ギャンブルにはまりやすい：

ADHDの方の脳の研究によれば、報酬系とよばれる脳の部分に大きな特徴が見られるそうです。ADHDの人は、他の人が回避するようなリスクを冒してでも、大きな報酬が得られる方を選ぶそうです。まさに、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」ですね。逆にいえば、同じことの繰り返しや古いものには、全く興味を引かれず、こうしたリスクな状況でないと興奮できないという特性があるのです。

ギャンブルこそ、変化に富み新鮮さを失わず、報酬が明確ですぐに得られる、ADHDの方の脳が喜ぶ刺激なのです。ここまでばっちりな刺激があると、「過集中」とよばれる、夢中になって何時間でも集中できるような状態へ移行します。普段の注意力散漫の様子からすると別人です。まさに「入り浸り」の状態になるのです。

ADHDでまだギャンブルの経験のない方は、どうぞ最初からお控え下さい。ギャンブルでなくとも、ネットゲームも依存性が高く、課金で破産する人もいるほどです。最初から刺激を避けるのが賢明です。

#### ③クレジットカードの限度額を把握できない：

クレジットカードでお金の管理ができなくなる方は、ADHDの方に限らず、けっこういらっしゃいます。原因のひとつとして、情報の「つかみ方」に特徴があるといわれています。情報のつかみ方には大きく分けて2タイプあり、物事を“感覚的に”つかむタイプと、“データや数字などに基づいて”つかむタイプの方がいらっしゃいます。前者を非言語的記憶が優位なタイプ、後者を言語的記憶が優位なタイプといい、お金の管理が苦手な方は、前者に当てはまることが多いのです。

物事を数字やデータに基づいて捉える、「言語的記憶を優先的に用いている人」は、クレジットカードの明細書に書かれている数字や、銀行の残高金額などの数字だけで、お金の残高を把握できます。これに対して、物事を感覚的に捉える、「非言語的記憶を優先的に用いている人」は、実際に「あと何枚お札がある」と見たり（視覚）、「財布がこのくらい膨



れている」と触れたりして（触覚）、お金の残高を把握した方がピンとくるのです。もちろん、



数字やデータを読めないわけではありません。文字としてわかっているし、意味を頭で理解はしているのです。しかし、数字を見ただけでは“実感”として、「お金がこれだけしかないんだ!」とわかりづらいということです。このために、使い過ぎや、クレジットカード破産が生じやすくなります。

ADHDの方で、お金が溜まらないという方は、一度だまされたと思って、クレジットカードを封印し、「現金管理」に変えてみてください。つまり、非言語的記憶をフル活用してみるのです。クレジットカード明細という数字による感覚（言語的記憶）で失敗しているのですから、財布に入れたお札の分厚さや、使えば目に見えて減って行く重さの変化、並べてみたコインの数の見た目、お金を管理していくのです。

いかがでしたか？ このサチコさんのお話は次回も続きます。

### 大賞に「たっせいかん」



長崎新聞 2016年8月12日  
作詞した「たっせいかん」が大賞に選ばれ、賞状を受け取る原口さん（左）＝長崎市民会館文化ホール

障害のある人が日常の思いや感動をつづった詩をメロディーに乗せて紹介する「わたぼうしコンサート in ながさき2016」が11日、長崎市魚の町の市民会館文化ホールで開かれ、島原市宮の町、原口美和さん（41）の「たっせいかん」が大賞に選ばれた。

実行委が毎年開き、21年目の今回は5～79歳から202作品が応募。同日は職場の仲間への思いや親への感謝を詩にした入選8作品が披露され、審査があった。

大賞と長崎あじさいライオンズクラブ会長賞に選ばれた原口さんは、取材に「職場の人への感謝を込めた作品が選ばれてよかった」と話した。作曲を担当した長崎市江里町の会社員、平石和之さん（53）も「とてもうれしい」と述べた。

ほかの入選作品は次の通り。（かっこ内は作詞者、作曲者の順。敬称略）

▽県知事賞＝『アサヨ』と『タツ』（中村達史、浜口博一）▽長崎市長賞＝「水道の蛇口をひねるみたいに」（田中美和、古本由美子）▽県教育長賞＝「心の中の自分」（森鉄男、松原広実）▽県社会福祉協議会長賞＝「キッチン えぷろん」（隈部大樹、野崎和俊）▽県

地域婦人団体連絡協議会長賞＝「幸せ」（安部恵子、笹田純冬）▽国際ソロプチミスト長崎会長賞＝「わたしの ゆめのうた」（酒井優和、松井哉）▽わたぼうしコンサート審査委員会賞＝「僕を産んでくれてありがとう」

**少女たちの売春の背景には 実態伝える企画展** NHK ニュース 2016年8月12日  
虐待や貧困などから少女たちが「売春」を行う実態があることを知ってほしいと、写真などを通して訴える企画展が11日から東京・新宿区で始まりました。

企画展は、少女たちを支援する一般社団法人などが開いたもので、会場には14歳から26歳まで

このうち、振り袖から見える腕に多数のリストカットの痕が残る写真は、家族から性的な虐待を受け続け、16歳のときに売春をし、自傷行為を繰り返した女性が20歳まで生きてきた証しとして撮影しました。また、母親が家に帰らなかったため駅前に立ち、食事を与えてくれる人を探したという女性は、少しでも暖を取りたいと自動販売機に体を押しつけたときの様子を写真に再現しました。会場を訪れた女性は「なぜ少女たちがこういうことに巻き込まれてしまうのか、本音の部分が分かりました」と話していました。一般社団法人「Colabo」の仁藤夢乃代表は、「自己責任と捉えられることが多いが、彼女たちの責任だけではなく、さまざまな問題が背景にあることを知ってほしい」と話していました。この企画展は今月21日まで、東京・新宿区の「神楽坂セッションハウス」で開かれています。



**中1男女殺害から1年 子どもの安全を守る新たな施設** NHK ニュース 2016年8月12日



去年、大阪・寝屋川市で中学1年生の男女が殺害された事件から、13日で1年になります。2人は、夏休みの夜から早朝にかけて街を歩き回っていて、男に連れ去られたとみられています。事件から1年になるのを前に、寝屋川市は、今月、子どもたちの安全を守ろうと、新たな施設を設けました。

去年8月、大阪・寝屋川市の中学1年生、平田奈津美さん（13）と同級生の星野凌斗さん（12）が遺体で見つかり、契約社員の山田浩二被告（46）が、2人を殺害した罪で起訴されました。夏休み中だった2人は、夜に自宅を出たあと、早朝にかけて駅前の商店街を歩き回っていて、車で連れ去られたとみられています。寝屋川市の駅の周辺では、今も、深夜に出歩く中高生の姿が見られます。事件から1年になるのを前に、寝屋川市は、今月、廃校になった小学校を活用して新たな施設を設けました。さまざまな事情で家庭に居づらい子どもなどが気軽に立ち寄れる場を確保し、安全を守る取り組みです。漫画本やテレビがあるフリースペースのほか、楽器やダンスの練習ができる部屋もあります。中高生を中心に、毎日、十数人が訪れ、大学生のボランティアが、親や先生には話しにくい悩みの相談も受け付けます。中学2年の女子生徒は「話せる相手がいて楽しい。年が違う人と話すのは初めてだったが、気が合って楽しかった」と話していました。寝屋川市青少年課の長澤哲治課長は「帰っても親がいない家庭などがあり、1人で孤立しがちな子どもが夜に出歩いてリスクが高まる。子どもたちが安全安心に集える場所として、活用していきたい」と話していました。予算の制約などから、現在、施設が利用できるのは午後8時までです。寝屋川市は、さらに遅い時間帯に子どもたちの安全をどう守るかについても、検討を進めることにしています。2人に対する殺人の罪で起訴された山田被告は、現在、裁判員裁判に向けた手続きが進められています。警察などによりまずと、事件について現在も黙秘しているということです。

## ＜社説＞児童虐待過去最多 大胆な防止体制確立を 琉球新報 2016年8月12日

児童虐待が1990年の集計開始以降、25年連続で増えている。取り組みは強化されてきた。対策が現状に追い付いていないということだ。

児童相談所の専門職を大幅に増やすなど、大胆な防止体制を確立することで、子どもたちに健全な環境を提供し、健やかな成長を保障したい。

厚生労働省によると、2015年度に全国の児童相談所が対応した児童虐待の件数（速報値）は、前年度比16%増の10万3260件で、初めて10万件を突破し、過去最多を更新した。

警察からの通報が大幅に増えたことなどが要因とされる。とすれば、これまでの統計は実態と懸け離れたものということになる。そもそも統計は児相が対応した件数であり、虐待に苦しむ子どもたちの実数を反映したものではない。事態は統計の数字以上に深刻だ。有効な解決策の確立を急ぐ必要がある。

沖縄県内は前年度比44%増の687件で、過去最多だった。10年度以降減少傾向にあったが、14年度から増加に転じている。

子どもの中で配偶者らが暴力を振るう「面前DV」と、子どもへの「暴言」を合わせた「心理的虐待」は全国で47・2%、県内では44・1%を占めており、ともに最も多い。

心理的に虐待しているのは、実母や実父がほとんどである。それを止められない親を立ち直らせることで、半数近くの児童虐待を防げる可能性がある。親への支援をさらに強化したい。

児相の適切な対応で救われた子どもたちは少なくないだろう。一方で、人員不足などから対応が後手に回った事例もある。

厚労省は児童福祉司などの児相の専門職を19年度末までに1120人程度増やす目標を決めている。増え続ける事案に対して、この人数で対応できるのか精査が必要だ。全国208カ所の児相の現状を改めて把握し、場合によってはさらに増員させることを考えるべきである。

守れたはずの命を守れなかったこともあった。二度と繰り返してはならない。児童虐待が後を絶たない現状に、社会全体で強い危機感を持つことが求められている。行政だけでなく、学校や地域などの総力を挙げて児童虐待根絶に取り組むたい。

## 「iPS細胞役立つ日近い」発表から10年、山中氏改めて意欲

読売新聞 2016年8月12日

iPS細胞（人工多能性幹細胞）の作製を世界で初めて、京都大学iPS細胞研究所の山中伸弥所長が発表してから、11日で10年を迎える。

山中所長は読売新聞の取材に「iPS細胞が患者を治すのに役立つ日が近づいている」と述べた。

山中所長は2006年8月にマウスから、翌年に人間の細胞からiPS細胞を作製したと論文発表した。14年には理化学研究所などがiPS細胞で作った網膜の細胞を目の難病患者に移植する臨床研究を実施。京大はパーキンソン病、慶応大学は脊髄損傷、大阪大学は重症心不全の治療の臨床研究などを計画している。山中所長は「パーキンソン病などの再生医療をいち早く実現したい。人工知能（AI）や（生物の遺伝子を効率良く改変できる）ゲノム編集などとiPS細胞を組み合わせ、新技術を開発したい」と意欲を示した。

